

# J.J. ライン著「中山道旅行記」邦訳（その3） —美濃を横切る—

山田直利<sup>1)</sup>・矢島道子<sup>2)</sup>

## 【訳者まえがき】

本邦訳は J. J. Rein (1880) の「中山道旅行記」(独文) を全訳し、それを(その1)～(その7)の7篇に分けて掲載するものである。原論文は「章・節」のほかには見出し語がなく、段落間の文章も長いので、邦訳では新たに見出し語を設け、またなるべく短く段落を入れた。原論文の脚注は、邦訳では原注として各章・節の末尾にまとめて配置した。訳者による注は訳文中の括弧〔 〕内に記入したほか、別に訳注を設けて原注の次に配置した。さらに原論文・原注・訳注に引用された文献のリストを章・節ごとに載せた。

## 2. J.J. ライン著「中山道旅行記—著者自身の観察と研究に基づき, E. クニッピング氏の路線測量に従い, その覚書を利用した—」全訳(つづき)

### 2.3 美濃を横切る(原論文のII章)

#### <関ヶ原>(第5図)

中山道はここ美濃ではすべて木曾川〔長良川・揖斐川を含む〕の流域内にあり、西の国境山地から、肥沃な水の大地、美濃・尾張平野〔濃尾平野〕を横切り、次いでそれまでとは違う丘陵地帯を経て、美しいけれど山勝ちの信濃国へ上って行く。近江から美濃への国境越え〔今須峠〕は柏原から1里の今須〔原文では Inasu〕の近くにある。

中山道は起伏に富む丘陵地帯を越えて隣接した平野へ下り、今須から1里で歴史上重要な関ヶ原宿に着く。ここで1600年10月に日本史上最も残酷でかつ最も重大な結果をもたらした合戦が行われた。徳川家康はこの地で敵の合同軍〔西軍〕を打ち破り、それからは順次屈服させることができた。しかし、関ヶ原合戦のもたらした結果はおもに以下の諸点であった。

- (1) 徳川將軍家の創設。それは権力および国運に対する帝の影響をなくし、それ以後250年以上にわたって江戸から国を専制的に支配した。

- (2) 数百年にわたる破壊的内戦の後の、同じように長い平和の時代の始まり。
- (3) 封建制度の完成。それはすでに12世紀末に源頼朝が基礎を作り、いまやきわめて独特の形式を持つに至った。
- (4) キリスト教の根絶。キリスト教は16世紀の中ごろからポルトガルの宣教師によって貧しく無権利の民に救済の福音として苦難のうちに宣教され、やがて深く根付いたものであった。
- (5) 鎖国ならびに外国人の往来を長崎に、かつオランダ人と中国人に制限したこと。そこでは彼らは決して名誉ある、またうらやむべき役割を果たしたのではなかった。



第5図 中山道路線図2。(関ヶ原—加納)

Rein (1880) の付図1「25万分の1中山道旅行路線図—大津から加納まで—」の北東部分を基図とし、それを約2分の1に縮小し、その上に中山道六十九次の宿駅(黒四角)名をやや大きな字で、また本論文で引用されたその他の地名をやや小さな字で和名表記した。

1) 地質調査所(現産業技術総合研究所 地質調査総合センター)元所属

2) 日本大学文理学部

キーワード: ライン, クニッピング, 中村新太郎, 中山道, 地形, 地質, 植物, 美濃, 関ヶ原, 金生山, 馬籠峠

尾張出身の老獺で野心的な農家の息子であった秀吉(太閤様)は、特異な軍事的、行政的資質によって最高権力の地位に登り詰め、日本の無政府状態に終止符を打ち、さらに彼の無敵の軍隊を朝鮮と中国への侵略のために派遣した。それにもかかわらず、彼は1598年の死に際して6歳の息子秀頼を決して確実とはいえない跡取りとした。秀吉に関東八州(江戸平野およびその近辺)の支配を任せられ、江戸を定住地とした家康、日本の歴史の中で最も卓越した人物は、未成年の〔秀吉〕子とその相談役たちに彼〔家康〕の権力と影響力を分かち与えようとはせず、むしろ彼自身が最高の権力を得ようと努力した。秀頼および太閤様が彼に付けた5人の大守たち—その中では石田三成が中心人物であった—の周りに、秀吉の死を前にしてなお新たな忠誠を誓った秀吉の全家臣と他のすべての大名たちが集まった。大名たちにとっては、長州の毛利や薩摩の島津の両大家のように、徳川家の増大する力がその国境内に止まることが大切であった。とくに秀頼の力をもって彼らの力も広げられると信じたキリスト教徒もまた同様であった。しかし、数においてはるかに優る軍勢および多くの著名な武将たち—その中では特に朝鮮における勝利者であったキリスト教徒小西(行長)(イエズス会員ドン・オースティン)がこちら側〔三成方〕に加担した—は、指揮系統においても目的追求においても統一に欠けていた。集合地点は大阪であった。〔三成方の〕合同軍はここから伏見を経て中山道へ、そしてそれに沿って美濃の大垣まで進み、そこで彼らは堅い陣地を敷いた。

その間に、家康に従う者たちは隣の尾張に5万人が集結した。徳川は同じくらいの大軍勢を江戸に集めていた。家康はその半分の軍勢と共に東海道に沿って進み、尾張で彼の部下たちと合流し、残りの2万5千人の軍勢は彼の息子の秀忠が中山道に沿って率いて行くことになった。家康は美濃の首府、岐阜の占領をもって彼の作戦を始めた。これに対して敵は大垣を放棄して、関ヶ原に向かって引き返し、そこで13万人の軍勢を中山道に面して、そして3里離れた伊吹山の支脈を背にして戦列を敷いた。一方、家康は7万5千人の軍勢をもって追撃した。激しい戦いは決着しないまま長い時間続いたが、最終的に指揮系統の統一性、迅速さ、そして慎重さによって徳川方が勝利を収めた。彼の息子〔秀忠〕は到着が遅れ、京都・大阪方面に向かって敵の追撃に加わることはできなかった。日本人の話によると、石田、小西、大谷のような傑出したキリスト教徒武将は京都で不名誉に殺されたが、そのときに彼らは自刃することを拒み、敵によって公然と処刑された<sup>\*1</sup>。他の大多数の者に対しては、家康は寛大、穏便に対処した。

関ヶ原から5分位の道を行くと、中山道の左側に松並木があり、相川峠の麓の古い土塚に向かう。塚上の敷石および苔に被われた囲いは、家康が合戦の間命令を発した場所であることを示している。しかし、村の京都側には別の土塚があって、その頂にある記念碑から、ここに首塚があることを思い起こさせる。その場所は軍の神、八幡を祀った社の近くにある。打ち殺された敵の首が埋葬されたこのような土塚は多分周りにもっと多く存在する。なぜなら、敗走中に死んだはるかに多数の兵を除いても、上記の合戦において敗北した軍勢のおおよそ1万名の兵がその命を失ったに違いないからである。

### <垂井・赤坂>

関ヶ原から1里半行ったところが垂井宿<sup>たるい</sup>であり、そこには女神、金山彦神<sup>かなやまひこのかみ</sup>(児玉, 1986; 原文ではKumigama Shiki Daijin)を祀った有名な神社〔南宮大社〕がある。その場所を過ぎた後に中山道から右へ立派な道〔美濃路〕が分岐し、その道はすでに述べた城下町大垣、すなわち大名戸田采女正〔氏共〕<sup>うねめのかみ</sup>の元の居城を過ぎて南東方向へ、尾張の大首府である名古屋に、従って東海道に通じている。垂井はすでにきわめて肥沃な美濃平野の中にあるが、中山道の左側にはなお森に被われた高地が、1里と3分の1里離れた次の宿、赤坂までなお連なっている。それは、北方に見えている、美濃の北西および西を限る長い山脈の一部である梅山<sup>\*2</sup>の支脈である。その支脈の最突出部である金生山<sup>きんしょうざん</sup>—赤坂北方の丘陵で、中山道からわずか12町しか離れていない—は、ここで採掘される色とりどりの大理石によって我々の特別な興味を引く。

〔金生山には〕黒色、赤褐色、灰色、しばしば白色縞状または全く白色の石灰岩が産出し、それらは、拳大およびそれより大きな球体、卵形、蓋の付いた杯および瓶形の小壺、小箱、硯などの、あらゆる小物に大量に加工され、旅行者へ売り出されている。(ここで同様に売られている美しい紅玉龍<sup>こうぎょくずい</sup>の玉は北陸道、特に加賀から産出するものである)。石は美しく磨かれ、その中に注目すべき化石、すなわち、ウミユリの茎やフズリナが見いだされるので、我々にとって一層の興味がある。特に灰色の石灰岩はフズリナによってびっしりと満たされている。その磨かれた表面には、暗色の基質中に灰白色の小舟の形、楕円形および環状の縦断面および横断面〔を示すフズリナ〕が密にちりばめられており、よく観察すれば肉眼でも房壁によって作られた対称的な小房構造を認めることができる。このフズリナは周知のように有孔虫類に属し、ここでは、ロシアおよび北アメリカにおけると同様に石炭紀層<sup>1)\*3</sup>を示すと考えら

れる。

赤坂を登って後は全く低地の中である。なぜなら、ここでは山地は左側にもずっと遠のいて、更地山<sup>34</sup>や文珠山<sup>35</sup>は北方に見える美濃・越前国境山地の最も外側の前衛と見なされるからである。多くの水量豊かな木曾川支流はこの山地に源を発し、街道は橋あるいは小舟によってそれらを渡る。それらは、周りに広がる田畑と多数の村落を洪水から守るために、高い堤によって縁取られている。このよく耕作された地方の光景は、農業に対して感受性と理解を持つすべての人にとって、いずれの季節でも快くかつ教訓的である。春に訪れるならば、深い畔の間に列をなして植えられた冬の作物：アブラナ、オオムギ、コムギおよびその他の豊かな、雑草に強い収穫物を見ることができる。一方、夏の盛りには、今では沼地に変えられた地面を被う若いイネの美しい緑を見て喜ぶ。しかし、秋には重く垂れた黄金色のイネの穂を眺めるが、その一つ一つはすべて夏の暑さや労働の証明なのである<sup>2)</sup>。美濃産の米は全国で最高の価値があり、それで徳川将軍もこの優れた食料品を自らの必需品としてここから取り寄せた。

### <美江寺・河渡・加納>

赤坂の先には美江寺<sup>36</sup>(原文では Meiji)、河渡<sup>37</sup>および加納の各宿駅が続く。美江寺では木曾川の最初の重要な支流を渡り、加納では2番目の支流を渡る。前者は呂久川<sup>38</sup>[揖斐川]と呼ばれ、後者は郡上川<sup>39</sup>[長良川]、ずっと下流では加納川とも呼ばれている。その間に街道はより小さい犀川と糸貫川[いずれも長良川の支流]をも越える。美濃国のこれらすべての河川、なかでも最初に挙げた2つの川では、ときに訓練されたウ(鶉)を使った漁労が行われているのを見ることができる。ウは中国におけるよりも使用されることはずっと少ないが、それは、非常に綺麗好きな日本人が不潔で臭い鳥と本当に親しくなることはできないので、分かりきったことである。

我々が小舟で渡った長良川(河渡川とも呼ばれる)の向かい側では、養蚕業が通常の農業と並ぶ重要な仕事として行われており、それはこれから先の街道の多くの区間でも同様であるが、一方、東海道ではそれはほとんど見られない。冬の作物が収穫され、米、綿およびその他の夏の作物が順次植え替えられ、そして農作業がいくらか休みになった後の夏の盛りに、鏡島村<sup>40</sup>、クモミ村<sup>41</sup>などの村々を通過してここに来るならば、いたるところで小さな織機や糸車が動いているのが見られるだろう。日本のこの地方の住民は勤勉さと温かい友情の気質を特徴としており、人々の仕事に深い関心を抱く外国人はいたるところで歓迎される。特

に興味があるのは昔の城下町加納の織物業である。なぜなら、ここでは主に高級な紋縮緬<sup>42</sup>が織られており、その際、一部では山繭<sup>43</sup>の光沢ある絹糸も使われているからである。

加納は大名永井侯(3万2千石)の領地であったが、その小さな城は痕跡さえも残っていない[1872年廃城]。1868-69年の王政復古は、国内の他の多くの箇所と同じように、ここでも「角を矯めて牛を殺し」、美術や骨董品の愛好家が興味をもって見たであろう多くの物を破壊した。

### <岐阜>

加納の1里北方には岐阜がある。岐阜は美濃国の首府、岐阜県の首府であり、飛騨国も岐阜県に属している。岐阜は人口1万人で、街道が加納を越えて通じている先の名古屋からは9里離れている。

付図[第5図]には岐阜は示されていないが、その北東側に険しく聳え森に被われた金華山<sup>44</sup>[標高329m]は図示されており、その頂上に織田信長が城を建てた。またそこからは2つの低くて同じように灌木林で覆われた丘、すなわち伊奈波山<sup>45</sup>[標高136m]と相場山<sup>46</sup>[標高206mの洞山か?]が中山道に向かって前に張り出している[山名は小井土由光氏のご教示による]。晴れた天気のあるときにはこれらの山頂から城下町名古屋と東海道の桑名を望むことができる。相場山はその名前を「相場の山」(Preisberg)から取っている。なぜなら、昔岐阜の商人たちはここに一種の光通信を創設し、旗を使って名古屋や桑名の商売仲間に米価を知らせたからである。

名古屋から加納を越えて岐阜へ至る街道[岐阜街道]は郡上川の谷を通過して北方へ続いており、有名な紙の産地牧谷<sup>47</sup>[長良川支流の板取川下流部]を左に見て八幡<sup>48</sup>[現郡上市八幡町]へ通じている。八幡は大名青山侯(4万8千石)の元の居住地であり、彼は、わがドイツ国の中世の野武士に似て、鬱蒼たる山、本物の青山(青い山)の上に高く彼の城を建てた<sup>49</sup>。絹織物を産する八幡から街道はさらに油坂峠<sup>50</sup>を越えて越前へ、そして日本海に通じている。

### <鶉沼一太田> (第6図)

加納の次は、4里半離れた鶉沼宿<sup>51</sup>である。中山道は小さな境川(すなわち境の川)を越えて続き、新加納で肥沃な平野を後にし、砂質の原<sup>52</sup>[各務原台地]を越え、疎らな松林を過ぎ、徐々に美濃東部の丘陵地帯に向かって上って行く。鶉沼に着く1時間前には、右手、木曾川の対岸に、従って確かに尾張の国に、犬山の円錐丘<sup>53</sup>が見える。犬山の

麓には同じ名前の街と大名成瀬の城〔犬山城〕がある。

鵜沼を後にすると道は急に約 60 m も上がり、鵜沼峠〔現うとう峠〕に着く。鵜沼峠では、大津からここまでの道を忠実に示してくれたありがたい伊吹山が最後の別れの会釈を送ってくれる。養魚池を右手にして、その側を通り過ぎると、道はふたたび峡谷のような谷を通過して、泡立ち怒号する木曾川の川岸に向かって下って行く。それから我々は木曾川の右岸に沿って太田宿まで行く。この道路区間は中山道全体のうち最悪の部分である。

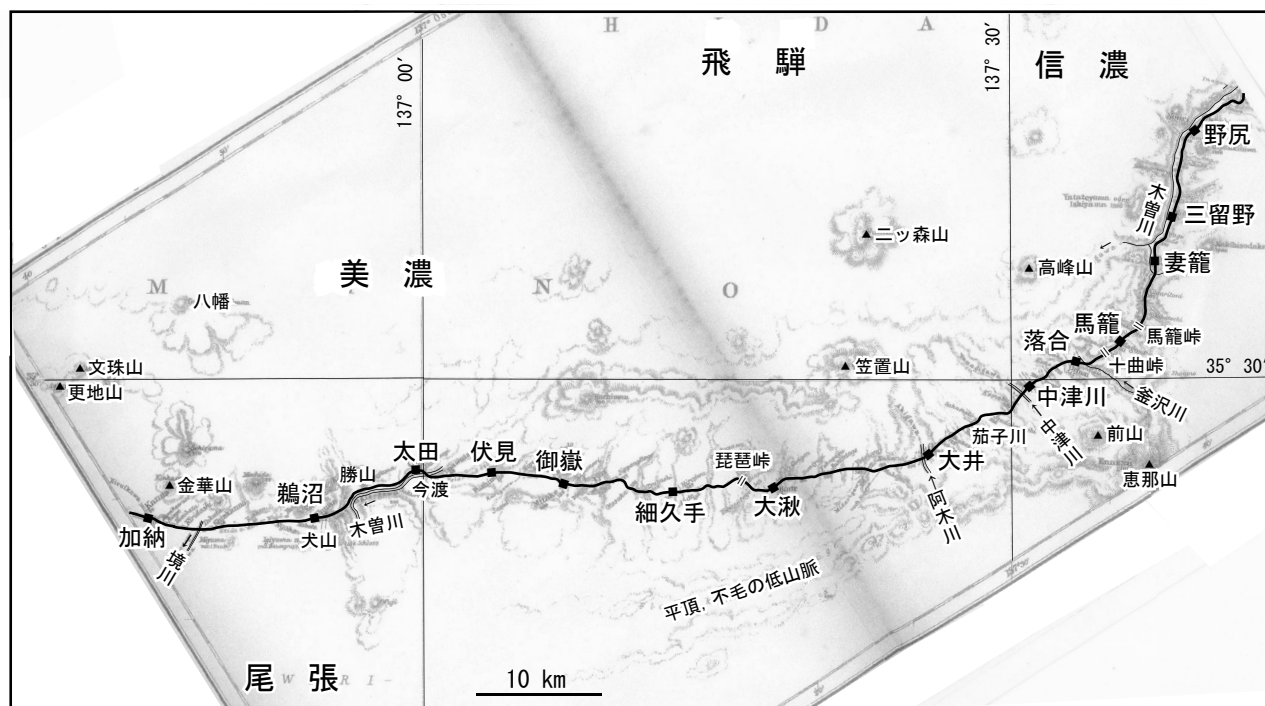
### <太田—馬籠>

太田の 2, 3 里北方には刀鍛冶師たち（兼元および兼光）によって古い時代から有名な町、関がある。太田を過ぎて小舟で木曾川を渡ると、今渡という所に着く。木曾川ここでは 50 m もの幅があり、それはここから半時間ほど上流に行ったところで飛騨川が合流して水量を増していたためである。中山道は、今渡で木曾川の左岸に移って後は、木曾川からあまり離れることなく、伏見、御嶽〔明治以降は御嵩〕、細久手、大湫〔大久手とも記す〕、大井、中津川、落合、馬籠の各宿駅を過ぎて、標高 797 m の馬籠峠<sup>\*10</sup> に向かう。馬籠峠は、美濃と信濃の古い政治的な国境ではないけれども、自然の境界である；中山道は〔自然の境

界である〕馬籠峠を越えるよりも 2 時間も早く、落合と馬籠の間〔十曲峠<sup>じゆつきよくとうげ</sup>〕で国境を越える。

木曾川は、この全部で距離 10 マイル〔1 ドイツ・マイルは 7,420 m〕の区間、全体として西から東へ向かう〔中山道の〕区間の左側のかかなり離れたところを流れているので、その河床をまれにしか見ることはできない。今渡と大井の間で、琵琶峠<sup>\*11</sup> の標高 543 m まで、そして次の大湫宿近くの標高 541 m まで徐々に上って行くのは波状で平らな山背を持つ丘陵地帯であり、それからは大井に向かって木曾川の左岸支流である阿木川の河床へ標高 290 m まで下り、そして美濃国境の標高 540 m の荒町<sup>あらまち</sup>でふたたびゆっくりと上り、標高 611 m の馬籠に至る。この地方の単調で殺風景な性質はきわめてまれに豊饒な谷凹地によって中断されるが、それは嬉しいことである。

東海道の国々、すなわち伊勢、尾張、三河および遠江の境界に、そして他方では近江と美濃に広がる丘陵には共通の特徴がある。標高 100 m ~ 500 m の平頂高地は多くは裸地でローム質の部分を示すか、あるいは砂およびチャート礫で被われ<sup>\*12</sup>、概して殺風景で不毛である。ここには美しい森も密集した緑の衣も全く見られない。低く散在する叢林、その中でも、ネズ、シオデおよびワラビは、あちこちにある不格好なマツの疎林と同様に、土地の不毛性を



第 6 図 中山道路線図 3. (加納—馬籠峠)

Rein (1880) の付図 II 「25 万分の 1 中山道旅行路線図—加納から下諏訪まで—」の西半部を基図とし、それを約 2 分の 1 に縮小し、その上に中山道六十九次の宿駅（黒四角）名をやや大きな字で、また本論文で引用されたその他の地名・説明文をやや小さな字で和名表記した。

十分に示している。

多くの地点、とくに細久手宿南方の月吉〔現瑞浪市明世町月吉〕で、我々は第三紀の植物印象化石および海生貝類化石を発見し、別のところでは黒ずんだ色のひどく風化した花崗岩、とくに我々が文象花崗岩<sup>\*13</sup>と命名した種類の大岩塊が露出するのを認めた。我々はふたたび、美濃と尾張の国境の勝山<sup>\*14</sup>におけると同様に、古い無化石粘板岩〔美濃帯のジュラ紀コンプレックス〕に出会う。この地方における豊富な粘土層〔鮮新統瀬戸層群〕は、美濃・尾張・三河3国の境界における文象花崗岩の風化長石と同様に、広域的な製陶業の基となっている。製陶業は美濃の南東部およびそれに接する尾張の多くの場所に広がっており、数千人の人々がそれに従事している。しかし、中山道で製陶業が行われているのは1か所、すなわち大井宿と中津川宿の間の茄子川のみであって、ここでは通常陶磁器や陶土製の食器が製造されている。

中津川〔原文ではNakasugawa〕は中津川<sup>\*15</sup>の右岸〔原文では左岸〕の肥沃な小平野に位置している。南からあるいは北から来た人々が近くの高みの1つに登り、そしてそこから街道と共に下ったとしたなら、この小平野および中山道に沿って長く伸びた快い小都会の眺めは驚くべき、かつ元気を与えるものである。この美しいオアシスでは、農作と並んで養蚕も熱心に営まれている。

「落合で風景は変わり、落合の上流でほとんど垂直な高い壁をもつ狭い谷からほとぼり出る釜沢川〔落合川〕の対岸では、あちこちの険しい斜面が現れ、長らく待ち焦がれた木曾川上流の山岳地帯にまもなく到達するだろうということを予感させる。人々は上記の荒れ川を渡り、馬籠まで上る谷の南側を登る。荒町の手前では寂しい茶店の傍にある国境標が美濃と信濃の境界を表示している；なぜ国境がここにあって、峠（馬籠峠）にないのかは、奇妙なことであり、それは歴史上の根拠によって初めてよく説明される」（クニッピング）。

## 原注

<sup>1)</sup> この記事が日本に住んでいる1, 2人の外国人地質家の目にも止まるだろうという期待をもって、私はさらに、同じ地層を私が京都および山城平野の北方の鞍馬山でも発見したことを付け加えたい。鞍馬の小村は京都の3里北方の森で被われた山間部にあり、ここで山城平野は終わっている。鞍馬は北方の高まりにある毘沙門様、すなわち力技と剣術の神の寺によって、また同じく、有名な英雄であり、若い頃ここに住み、夜一人で徘徊していたときに山の悪魔、天狗様に会い、彼に剣術を教わった源義経によって、よく知られている。いまでもこの寺では義経の剣あるいは大刀を見ることができ、同じように、峠道の背比べ石の近くの森の中で高く伸びた、垣をめぐらした古いスギ、大杉を見ることができる。このスギは胸の高さで周囲6.15 mもあり、山の妖怪に初めて出会ったところと言われている。常緑樹

のカシワ、ツバキ、ヒメシャクナゲの藪およびモミの疎林のいたるところに灰色石灰岩の大岩塊が分布しており、そこからはウミユリの茎が部分的に飛び出している。ここに産出する石灰岩と赤坂のそれとが琵琶湖の北部および東部の山々を通して繋がっているということは、ありえないことではないように思われる。

<sup>2)</sup> 心学道話<sup>\*16</sup>〔原文ではShinga Kudowa〕、巻のII、第2部ではこう書かれている：「民草の夏のかせぎのほどほどの穂にあらはれてみる秋の田」。それは英語では次のように意識されている。「見よ！ 多くの秋の平野ではすべての穂が夏の苦勞のすべてを無言で示している。」

## 訳注

- \*1 ここに挙げられた3名の武将のうち、石田はキリスト教徒ではない。また大谷は京都で処刑されたのではなく、関ヶ原の戦場で自刃している。
- \*2 垂井宿北方の池田山（標高924 m）を指す（中村, 1931, p.287）
- \*3 赤坂石灰岩が石炭系とされたのは、Gümbel (1874)がウィーン万国博覧会に出品された日本産フズリナ石灰岩の標本（おそらく赤坂産）のフズリナを鑑定して、これを石炭紀の化石としたことによる。その後の研究により、赤坂石灰岩を含めて、日本のフズリナ石灰岩はほとんどが二畳紀のものと考えられるようになった（加藤, 1993）。
- \*4 美江寺宿北方の石山（標高392 m）を指す（中村, 1931, p.288）。
- \*5 鏡島村は河渡と加納の間の小村。クモミ村の所在は不明である（中村, 1931, p.289）。
- \*6 縮緬地に文様を画き出したもの。岐阜、京都、福井などで生産される。
- \*7 クヌギ、コナラなど、クワ以外の野生植物を食して生育するガの作る繭。天蚕ともいう。
- \*8 八幡城は戦国時代に遠藤盛数により築かれ、その後、稲葉・遠藤・井上・金森・青山と領主が交代するたびに改修を重ねられたが、明治初年に城の建物は破却された。現在の八幡城は1933年に再建されたもの（南條・奈良本, 1989）。
- \*9 犬山は美濃帯コンプレックスのチャートからなる小山で、円錐形火山ではない（吉田・脇田, 1999）。
- \*10 原文ではMissakatôge。この峠は江戸時代には妻籠峠、馬籠峠、木曾の御坂などと呼ばれていたが、ラインが旅行した頃には専ら馬籠峠と呼ばれるようになっていた。ラインは古称「木曾の御坂」からMissakatôgeと呼んだのであろう。なお、中村（1931, p.291）はこれに「神坂峠」の字を当てているが、神坂峠は岐阜県中津川市と長野県阿智村との間にある標高1,595 mの峠であり、古代東山道の交通の要所であったが、後に中山道が神坂峠を避けて木曾谷を通るようになったため、神坂峠は廃れた（この項、荻野義雄氏のご教示による）。本邦訳では原文のMissakatôgeはすべて馬籠峠として表記する。
- \*11 原文ではHibarutôgeとなっている（中村, 1931, p.291）。
- \*12 ローム質の部分は風化火山灰層（更新統）、砂およびチャート礫のあるのは土岐砂礫層（鮮新統）の露出する地帯であろう。
- \*13 長石（ふつうカリ長石）と石英との文象連晶を特徴とする花崗岩。前者の結晶中に後者の多数の楔形文字状の結晶が連晶する。
- \*14 原文ではKachigawaとなっているが、勝山〔現加茂郡祝町勝山〕の間違ひである（中村, 1931, p.291）。犬山・勝山間の木曾川の両岸には美濃帯コンプレックス（チャート・泥岩・砂岩）が連続的に露出し、この露頭の観察に基づいて層序・テクトニクスの詳細な研究が行われている（小嶋, 2006）。この区間の木曾川はドイツのライン渓谷に似ていることから、「日本ライン」（志賀, 1894）とも呼ばれている。
- \*15 ラインは中津川のことを間違ってYamagigawa（Weidenflusse,

直訳すれば柳川)と書いている。中津川は江戸期、川上川あるいは中津川と呼ばれたが、明治以降は専ら中津川と呼ばれている。「柳川」と呼ばれたことはない(荻野義雄氏のご教示による)。

\*16 江戸時代、神、儒、仏の3教を融合して、その教えを平易な言葉と通俗なたとえで説いた庶民教育。石田梅岩(1685-1744)が始めた。

**謝辞：**岐阜大学教育学部名誉教授の小井土由光氏からは岐阜市内の山の旧名について示唆を頂いた。元中津川市鉱物博物館館長の荻野義雄氏からは、馬籠峠や十曲峠の名称の由来を詳しくご教示頂いた。両氏に深くお礼申し上げる。

### 文 献

- Gümbel, C. W. (1874) *Japanische Gesteine. Das Ausland*, 23, 479-480.
- 加藤 誠 (1993) 1940年代前半までの日本の古生層研究史。日本地質学会編「日本の地質学100年」, 33-38.
- 児玉幸多 (1986) 中山道を歩く。中央公論社, 東京, 434p.
- 小嶋 智 (2006) 犬山地域のチャート・碎屑岩シーケンス。日本地質学会編, 日本地方地質誌, 4, 「中部地方」, 朝倉書店, 東京, 216-219.

- 南條範夫・奈良本辰也監修 (1989) 日本の名城・古城事典。TBSブリタニカ, 東京, 508p.
- 志賀重昂 (1894) 日本風景論。政教社, 東京, 219p.
- 中村新太郎 (1931) 新訳日本地学論文集 (16)~(17), ライン—中山道誌 (2~3)。地球, 16, 188-199, 279-292.
- Rein, J. J. (1880) *Der Nakasendô in Japan, nach eigenen Beobachtungen und Studien im Anschluss an die Itinerar-Aufnahme von E. Knipping und mit Benutzung von dessen Notizen. Petermann's Mittheilungen, Ergänzungsheft*, No. 59, S. 38.
- 吉田史郎・脇田浩二 (1999) 岐阜地域の地質。地域地質研究報告 (5万分の1地質図幅), 地質調査所, 71p.
- 
- YAMADA Naotoshi and YAJIMA Michiko (2018) Japanese translation of "Der Nakasendô in Japan" (Rein, 1880), Part 3—Crossing Mino—.

(受付: 2017年7月19日)